

バスケットボール競技のスポーツ合宿地としての可能性 北海道における事例比較

著者	横山 茜理, 石澤 伸弘
雑誌名	北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
巻	6
ページ	37-42
発行年	2015
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001280/

バスケットボール競技のスポーツ合宿地としての可能性 —北海道における事例比較—

Potential as a Sports Training Camp of Basketball — A Case Study in Hokkaido —

横 山 茜 理¹⁾
Akari YOKOYAMA

石 澤 伸 弘²⁾
Nobuhiro ISHIZAWA

I 緒 言

2020年の東京五輪開催が決定したことによって、北海道では「なんとしても数多くの事前合宿の誘致を！」が合い言葉となりつつある。東京圏のみならず、地方への五輪波及効果と呼び込む意味でも、スポーツ合宿地を決定することは重要なことである。石澤らは(2014)北海道内者を対象とした合宿は、実施件数・参加実人数共に増加傾向にあるものの、道外からの同データを含めると、参加実人数は減少傾向にあると述べている。

丹埜ら(2009)によると、「合宿産業」は一見非常にニッチな市場で、客単価が低いうえに季節変動の大きく、収益性の低いビジネスと思われがちであるが、実際は、景気の変動にあまり左右されない一定の市場規模がある。しかし、一般的に合宿事業があまり注目されていないため新規参入が少なく、それ故、蓄積されている先行研究も少ないことが報告されている。また、田邊(2010)は、「合宿産業」の特徴として観光消費型産業のメリットにプラスして、「地域アイデンティティの

醸成」や「他地域との交流促進効果」、そして「人材育成効果」、「施設・都市インフラ整備による経済効果や振興効果」などが期待できると述べている。そして、押見ら(2012)によると、スポーツ合宿を行う意思決定者の特性や意思決定方法及び、意思決定プロセスを探っている。しかしながら、具体的にプロスポーツにおけるスポーツ合宿の現状は明らかにされていない。

これまで日本バスケットボール界は、様々な問題・課題に対し、根本的な解決や合意形成には至らず、結果、2014年11月にFIBA加盟国協会としての資格停止処分を受けると言う最も大きな困難に直面した(JAPAN 2024 TASKFORCE, 2015)。しがしながら、オリンピック種目である「バスケットボール」は国内での人気や今までの世界選手権やユニバーシアード等の国際大会開催実績があり、今後の東京オリンピックへ向けた合宿誘致もニーズは大きいと考えられる。

そこで、日本のバスケットボールチームを事例にスポーツ合宿の現状と可能性を明らかにする必要があると言える。

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 北海道教育大学札幌校

Ⅱ 目 的

本研究の目的は、北海道でスポーツ合宿を行っている WJBL 所属のバスケットボールチームを事例にスポーツ合宿地としての今後の可能性と現状を明らかにする。

Ⅲ 方 法

1. ヒアリング時には本調査の目的・概要のみならず、個人情報やプライバシーは守られる旨の説明を行った。ヒアリングは30～60分とし、情報提供者の了解を得た

- 上でICレコーダーを用いて録音を行った。
2. 調査時期については、2014年10月から11月に各チームを訪れ、コーチまたは、チームスタッフと合宿地選考に関わる人物に対して行った。
 3. 調査内容は、1) 選考要因、2) 促進要因、3) 合宿地への要望、などをたずねた。
 4. 分析方法としては録音したデータから逐語録を作成し、複数の研究者で文脈分析を行った。そしてその内容を基に合宿地として促進、または選考された要因を「特性要因図（石川、1956）」を用いて視覚化した。

表1. インタビュー結果

場 所	Aチーム		Bチーム	
	道北	道東	道東	道東
時 期	5月	6月末～7月	8月下旬～9月	7月
目 的	トレーニング	脚力強化 体力強化	走力トレーニング	走力トレーニング クリニック
目 標	体力・身体づくり	心の強化 精神的強さ	芝を走る	トレーニング
環 境	体育館	競技場	芝コース	競技場間が近い
	ランニングコース	体育館	広い	プール
決定方法	他種目からの紹介	紹介	出身者が居たこと	
条 件	坂や階段がある	競技場がある	費用	人のつながり
	砂浜	クロスカントリーコース	時間調整	熱意
メリット	食事の豊富さ	意欲増進	梅雨がない	食事
	梅雨がない	避暑	避暑	人間関係
デメリット	天候の調整	練習場が遠い	時間調整	早朝の利用
	寒すぎる	道路の安全性		水、水等の雑費
期 待		時間調整	時間調整	行政の対応
		トレーニング設備の増加		選手に好影響
滞在期間	約10日間	約10日間	5日間	7日間

Ⅳ 結果及び考察

北海道でスポーツ合宿を行っているチームに合宿地選考の現状や今後の可能性を明らかにするために、まずインタビューの結果を表1にまとめた。そこから、詳細なデータを特性要因図にまとめ、スポーツ合宿地の選考に関わる要因を明らかにした。

その結果、「費用」「サポート」「環境」「気候」「食事」といった5つの要因が以下にヒアリングで得た象徴的な言説を示しつつ、その根拠を列挙する。

Ⅳ-1 「費用」

費用に関しては、合宿地を選定するうえで重要な事柄ではあるが、チームによって一定の金額を提示しその金額の中で交渉や行政との調整があるということが分かった。

一方のチームでは、施設や宿舎それぞれと交渉することや時間支払も検討事項ではあるものの北海道という土地は移動費もかかることから各地との交渉が大きいということが言える。

Aチームは以下のように答えている。

A) お金の件だけど、一回の遠征分がなんとなくこれくらいの予算っていうことが決まっているため、〇〇〇は民宿みたいな場所であったたこともあり、〇〇〇は割高に感じた。

Ⅳ-2 「サポート」

サポートとしては、行政の担当者がどこまで協力的に事前下見や合宿機関の対応が取れるかによって大きな違いがあることが分かった。

合宿地の選考として、初めていく場所や施設の場合、使い勝手や周りの整備を含めた対応が大きな要因となっている。また、地区協会や連盟のサポートも大きい。こういった人とのつながりによっても合宿地選考に変化がみられた。

Bチームでは、以下のような意見が上がった。

B1) 対応等が全く違かったから、私に今年やりたいですって言ったときに、いろいろな待遇っていうの、お金だけじゃなくて、場所の確保とか時間の融通とかが全くきかなくなって。本当にもう（合宿地を）変える寸前までいって。そのときある先生が本当に、つないでくれて、すごいよかった。…（中略）…

B2) 芝の状態まで見てくれて。

B1) わざわざ。

B2) だからそれは、地元出身者がいなかったらその先生とも、…（中略）…心を動かされるのは、安さとか利便性だけではなくて、そこに介在する人たちがどんな人たちかによって行ってみようかなとかやってみようかなとか思う。だからそういうのを誘致するときって、やっぱり人だっていう。施設がいいとか安いとかじゃない。それは安い方が施設がいい方がいいに決まっているんだけど、そこでなんか事務的に、…（中略）…なんとか誘致するチームのために動く、やっぱり心動かされるよね。だから窓口をだれにするかっていうのは、だれだったのかってのは非常に大事で、それによって引き続き来年お願いってなるかやめようぜってなるのか。

IV-3 「環境」

環境については、各施設の有無や器具のレンタル・安全性が保てるかが焦点となる。陸上競技場や階段、芝また、体育館の状況までといったスポーツ合宿を行う目標が達成できるような環境が保たれることが前提となった。そういったことでは、今回の事例では、多少の不便さはあったものの事前の準備の段階で修正が可能となったことが伺える。

Aチームでの意見：

A) あ、体育協会の方に結構お手伝いしていただいて、その体育館に必要な用具だったり器具だったりとかその練習の時に使う電子タイマーとかそういうのはほとんど貸していただいたので、あとは場所だったり、例えばホテルのさっき言ったマラソンコースは、ホテルの方が社長さんに「ここあるよ。」っていう所を教えてくれて、で体育協会の方に聞いてみるとやっぱり知ってるんですよ。で、ここへこう行ってみたいんですけどっていう話をして、「何キロコースにしますか？」って言ったら「5キロぐらいで」って言ったらきちんとマークをつけていてくれたりとか。…（中略）…そういう時にちょっとお手伝いをお願いしたら協力していただけたので助かりました。

Bチームでの意見：

B2) あとはプールがあるのがいい。リハビリの子もいるだろうし。

B1)トラックも使いますよね。

B2) やったやった。

B1) あともし雨が降った時のこともいろいろ考えてくれてて、そのときはパワーマックスがちゃんと整ってるかだとか、トレーニング施設が対応が効くかとか。

IV-4 「気候」

気候に関しては、北海道は大きなメリットがある。それは梅雨といわれる時期がないということである。近年では異常気象や地球温暖化が叫ばれているがそれでも、せっかくのトレーニング合宿が雨で使用不可能となるとそれは、目的を達成できないからである。しかし、デメリットとしては5月などでは、寒すぎて体調を崩してしまう恐れがあるなど特徴がマイナスに働いてしまう可能性もある。

Aチームでの意見：

A) あとは寒かったです。やっぱどうしてもすごく海沿いだったので、風がすごくて、あとは汗かいちゃうけど、ちょっと待ってレストしていたら冷え切っちゃって逆に風邪をひいちゃいそうな状況だったから。

I) 天気は悪くないわけでしょ？やっぱり外気温ってことがですね。

Bチームでの意見：

B1) あともし雨が降った時のこともいろいろ考えてくれていて、そのときはパワーマックスがちゃんと整ってるかだとか、トレーニング施設が対応が効くかとか。…（中略）…

B2) 来年はまたね、シーズンの開始がちがうんだ。そうしたときに、7月じゃなくて。

B1) 早まりますよね。

B2) 早まるよね。そうすると、5月ぐらいにトレーニングで行かしてもらえたらいいのかなあと。

I) 逆に寒いぐらいかもしれないですね。

B1) それはあると思う。

B2) だからそれは逆算して考えなきゃいけないね。

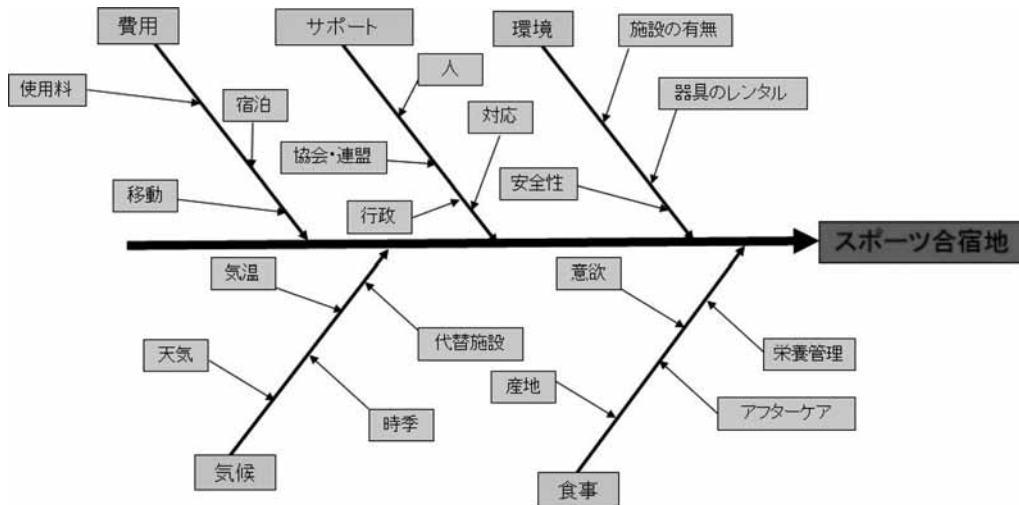


図1. 特性要因図

Ⅳ-5 「食事」

食事に関しては、北海道には大きな可能性がある。食材の豊富さや海産物から肉類まですべてのものが普段食べられないものが多い。また、こういったトレーニング合宿では、疲労困憊になるまで追い込み、トレーニング後には食事でも喉を通らない状況も考えられる。そこで、食欲の増進が考えられる道産食材の料理を食べれば少し食べてみようかなという気にさせる可能性もある。そういったことでも、影響力は高い。

Aチームでの意見：

A) ただ、でも食べるものに関しては北海道じゃないと食べられないものってすごく魅力的だと思うんですよね。今回あの、ジギスカンはちょっと人によりちょっとこれあんまり食べられないっていう子はいたんですけど、…(中略)…やっぱりいつも食べられないものだから、やっぱり疲れていても食べようかなって思うじゃないですか。だからあのバーベキューとかでも海産

物とかが出てくると、いつもは肉なのに、そっちをもっと食べようとか、…(中略)…やっぱりそういう北海道ならではのラーメンが美味しいとか休みの日にちょっとラーメン食べたいとか。最後あの、〇〇の時は最後の最後に午前走り込みやってお昼ご飯食べて移動だったんですよ。…(中略)…結構喜んでいたら、そういうのでちょっとモチベーションを上げたりとか。

以上のように、スポーツ合宿地として選考する要因として、5つの項目が挙げられた。

そして、特性要因図で詳細をあらわすと図1のようになった。「費用」、「サポート」、「環境」、「気候」、「食事」の5つの「大骨」の中には、それらを更に具体的に示した「中骨」が存在し、それらが有機的に絡み合うことで「スポーツ合宿地」としての地位が高まっていくことが示唆された。

現状としての課題は、北海道の土地柄を生かした内容提供がいかにかにできるか、また施設

や競技性の問題で準備段階での対応が可能になるかどうか大きな要因となった。それには、行政も地元の関係者も多く関わっており、費用面とサービスの充実がよりチームには求められていることが推察できた。

今後、このような自治体が増えていくためには、ハードな面の充実ももちろんながら、その団体の合宿目標が達成できるように町全体で協力できるかが誘致していけるかといった可能性が出てくるのであろう。

Ⅳ-6 今後の課題

今回は、事例としてインタビュー調査を行った結果であったため、他の種目やチームによっては、別な特性要因もあらわれる可能性があることから、今後は他種目・他のチームにも同様のインタビューを行って、今回の要因の妥当性を高めていければと考えている。

における意思決定プロセスの検討：高校・大学スポーツチームに着目して スポーツ産業学研究 Vol.22, No.1 p9-27.

3) 丹埜倫 (2014) 地域の未利用インフラを活かす「合宿ビジネス」サービス革新第5号 pp34-39.

4) 田邊勝彦 (2010) スポーツを通じたまちおこし 佐賀大学経済論集 Vol.43, No.4 pp1-16

5) 石川馨 (1956) 『品質管理入門』QCテキスト・シリーズ1, 日科技連出版社

6) 北海道環境生活局スポーツグループ (2015)：平成24年度市町村におけるスポーツ合宿の実態調査結果,

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/bns/sports/gasshuku/gasshukukensaku.htm>

V 付 記

本研究は笹川スポーツ財団の助成研究(140A2-008)を受けて実施されたものである。また、研究の内容に関しては北海道教育大学の研究倫理委員会において承認を得たものである。

Ⅵ 主な引用参考文献

- 1) 石澤伸弘, 横山茜理 (2014) 道内におけるスポーツ合宿の現状調査 北海道体育学会第54回大会プログラム・予稿集 p29
- 2) 押見大地, 原田宗彦, 佐藤晋太郎, 石井十郎 (2012) スポーツチームの合宿地選考